慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国語科教科書の中の「宮沢賢治」：「伝記教材」を視点として
Sub Title	"Kenji Miyazawa" in Japanese language's textbooks
Author	葛西, まり子(Kasai, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.88, (2005. 6) ,p.36- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00880001-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国語科教科書の中の「宮沢賢治」

――「伝記教材」を視点として――

葛西　まり子

0　はじめに　国語科教科書における「伝記教材」

宮沢賢治は、童話・小説・詩等、その形式を問わず多数のテクストが国語科教科書に掲載されている作家である。殊に近年その掲載数は増加傾向にあり、現行教科書においては小学校用教科書で六社六種中全種類が、また中学校用教科書では五社五種中二種が何らかの賢治テクストを掲載している。[1] 近年におけるこうした隆盛傾向には複数の要因が考えられるが、それを探るためにも、本稿では教科書というメディアにおいてこれまでどのような「宮沢賢治」像が生成されてきたのか、ということに焦点をあててみたい。

国語科教科書において生成される人物表象には様々なものがある。最も多いのは、評論や小説等といったテクストが教材化された場合にその教材の作者として紹介されるという形によるものであろう。またその派生として、文学史上の人物として導入されることもある。だがそうした人物表象は、言わば教材という主体があってこその副産物である。一

方これとは逆に、人物表象そのものが教材となる場合がある。主として一人の人物の紹介そのものを目的とした教材、すなわち所謂「伝記教材」である。

安藤修平の「戦後中学校国語科教材の史的展開――伝記教材を中心として――」を参照すると、「宮沢賢治」は比較的長期にわたって「伝記教材」として登場していたこと、しかも単一の出版会社にのみならず、複数社によって教材化されていたことが分かる。[2] 職業も国籍も異なる様々な人物の伝記が取り上げられてきた「伝記教材」の中で、「福沢諭吉」や「キュリー夫人」と言った圧倒的に掲載頻度の高かった人物を別とすれば、かなり登場頻度の高い方であったと言えよう。そこで本論では、特にこの「伝記教材」の中の「宮沢賢治」について、調査・考察を重ねたいと思う。

さて、まずその「伝記教材」とは、どのような性質の教材なのであろうか。高野光男は「伝記とは、ひと言でいえば、ある個人の生涯の事蹟を書いた記録である」としながらも、次のように述べている。

> 教科書に採録されている伝記教材を考えると、分量の制約から全伝（いわゆる「生涯もの」）はありえない。多くは抄伝、略伝であり、いわゆる「逸話もの」、「事業もの」と呼ばれる。これらと、ある実在した人物の生涯を紹介しながら、その行動や業績を論じた評論との区別は曖昧であり、実際そうした文章が伝記教材として採られた例も多い。また逆に、伝記として書かれた作品でも、教科書採録にあたっての作品の切り取り方によっては伝記的な性格を失ってしまう場合も考えられよう。[3]

このように、「伝記教材」を教材それ自体として考えなければならない場合には様々な問題があることが分かる。しかし本稿では、それら「伝記教材」によってどのような人物像が形成されたのか、あるいはされようとしたのか、ということに注目する目的から、ある特定の人物を紹介する目的で書かれた文章を教材化したものを「伝記教材」と呼ぶことにし、結果的にある人物を紹介している教材も「伝記教材」の亜種として捉えていくことにしたい。なお、教材の読解の方向性を左右する指導書等も考察の対象とすべきなのだが、過去の指導書の調査が困難である等の理由から、本論では教科書の本文のみを調査対象とする。

以下では実際の「伝記教材」における「宮沢賢治」の語られ方を参照していくが、ここでは「宮沢賢治」の生涯の中のどのようなエピソードが選択されているのか、また作家である「宮沢賢治」のどのような作品が触れられているか、ということに注目して行きたい。

1　昭和二十年代～昭和五十二年　「雨ニモマケズ」と「グスコーブドリの伝記」

「伝記教材」のごく早い時期のものに、学校図書の『中学校国語二上新版』（昭和二十九年）と『中学校国語二上』（昭和三十五年）で掲載された谷川徹三による「宮沢賢治」という教材がある。[4] 二十九年版では「人々のために」と題された単元で、単元のリードには、

すぐれた人、えらい人とは、どんな人をいうのであろう。高い位についている人をさすのであろうか。たくさんの財産を持っている人をいうのであろうか。世の多くの人々から尊敬されるのは、いったいどんな人であろうか。

中には、その人が生きている間は、むしろ、人からあっぱくさえされながら、後の世にうやまわれる人もあるが、それはなぜであろうか。

とある。そして、こうした「問題」を解く鍵になるだろうとして、「宮沢賢治」とシュヴァイツァーについての文章「原始林の聖者」の二編が挙げられている。この二十九年版に見られるような構成からも、「人々のために」生きた偉人として描いていこうとするベクトルが予想されうると言える。三十五年版では伝記単元ではなくなるが、「宮沢賢治」の本文は変わらない。

本文前半におけるその生涯の簡単な紹介の後、後半では「なくなる二―三日前のようすは、家の人たちによって伝えられていますが、これは、賢治の人がらを、もっともよくもの語っています。」として、死の前日に尋ねてきた村人の肥料相談にまつわるエピソードが中心に紹介されている。

その夜七時ごろ、見知らぬ村人がたずねてきました。肥料のことできたいことがあるというのです。家族は、賢治の容態を知っているのでこまりましたが、とにかくとりつぎました。すると、賢治は、そういう人なら、どうしても会わなければならないと言って起きあがり、衣服を改めて、客に会いました。客は、賢治がそんなに重態だとは知らず、ゆっくり話しこみました。それを、賢治は、きちんとすわったまま、ていねいに聞き、一つ一つ指導してやったのです。家族は、気が気でありませんが、どうすることもできません。一時間ほどして、やっと客が帰ると、賢治はぐったりととこにつきました。

そして、「死に至るまで、農民のために、しんせつに指導する心。なんというやさしい、意思の強い人でありましょう。かれは、世の中に不幸な人がひとりでもいる間は、じぶんだけ幸福でいることはできないと考えていたのです。」と、「農民芸術概論綱要」を引用して、このエピソードを意味づけていく。[5] すなわち、「宮沢賢治」の言動を単元名のとおり、「人々のために」なされたものとして捉え、そのように描写していこうとするのである。

しかし特筆すべきなのは、この後「ねてもさめても農民たちのことを考えていた、賢治の精神を表わす童話の一つに、「グスコーブドリの伝記」という作品があります。」として「グスコーブドリの伝記」の梗概が紹介されることであろう。この教材の冒頭では、賢治の童話として「「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」「どんぐりと山ねこ」「セロひきのゴーシュ」「雪渡り」「オッペルと象」」といったタイトルが挙げられている。[6] これらと比して「グスコーブドリの伝記」は明らかに知名度が低いと言ってよいテクストだろう。現に、教材ではこの作品の梗概がわざわざ紹介され、そのために二ページ近くが割かれているのである。[7] このように紙幅を費やして梗概を示しているということは、この教材があまり知られていないであろう「グスコーブドリの伝記」にそれだけ重きを置いていたということを示していよう。「グスコーブドリの伝記」は、苦労ののちに「イーハトーボ火山局」の技師となったグスコーブドリが冷夏の年に自らの身を挺して「カルボナード火山島」の火山を噴火させるという内容の長編だが、梗概の半分以上はその「カルボナード火山島」にまつわる部分に割かれている。そして、教材本文は「賢治は、ブドリのようなえいゆう的な死にかたはしませんでした。しかし、賢治の死をブドリの死にたとえることはできないでしょうか。」と結んでいくのである。

この教材では、この大きな二つの要点が中心となり「宮沢賢治」が形成されている。すなわち死の直前まで農民のた

めに力を尽くした「宮沢賢治」と、その賢治が描いた人々のために自分の命をもって冷害を防いだ「グスコーブドリ」という二点をつなぐことで、他者のための自己犠牲を理想とし、更にはそれを実行しさえした「宮沢賢治」という形での語り方が成されているといえる。

ついで現れたのは、大阪書籍の『中学国語二』（昭和三十六年）に掲載された「宮沢賢治」という教材であった。この無記名の「伝記教材」には、「なべての悩みをたきぎと燃やし／なべての心を心とせよ（農民芸術概論綱要）」「雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ／……（手帳・十一月三日）」といった引用の仕方に見られるように、賢治のテクストからの引用文が多いという特徴がある。他にも、「妹とし子」の死に際して書かれた「松の針」や、下根子桜での生活の時代に沿った詩「春」等が引用されており、賢治の書いた文章や詩を交えながら構成することで、この教材は「宮沢賢治」の作家としての側面を押し出したものになっていると言える。しかしその中でも、童話作品の中からはやはり「グスコーブドリの伝記」を特に挙げて梗概を示し、更にはグスコーブドリの生き方を「わたしたち人間のなしがたい清浄な精神的世界の極致に至っている」と称揚して、そうしたあり方を「賢治の一生、賢治の生き方のすべてではなかっただろうか」と「宮沢賢治」につなげていく語り方は、先程の学校図書版の方向性と近しいと言える。だが一方教材末尾の臨終時の描写においては、肥料相談のエピソードではなく、「法華経全品、一千部」を知己に贈ることを家族に頼んだというエピソードを挙げている。このように、学校図書版のように自己犠牲的なあり方の「宮沢賢治」を志向しつつも、賢治の仏教への信仰心、妹とし子への思いや、また賢治の作品それ自体等といった様々な側面にも焦点が当てられているのが特徴であると言える。

しかしこの教材はわずか一期で終了し、次期の『中学国語二』（昭和四十年）には「宮沢賢治」関連教材として、童話の「めくらぶどうと虹」とともに、依田義賢による「桜の住まい」という戯曲風の教材が入る。教材冒頭で「時　昭和3年・稲の花のつくころ／所　岩手県花巻町下根子桜」という賢治の下根子桜時代を想定した設定が示されるように、「宮沢賢治」が主人公の物語が事実に沿って創作された内容となっている。冒頭「麦わら帽子をかぶり、野ら着の宮沢賢治が黙々とくわを使っている。人間の生きる道を求めてやまぬ人の孤独な姿である。」にはじまり、「はるかな作業」を朗読したところへ、その詩の中に登場する「忠一」がやってくる。[8] 以降、弟子たちを思いやる様子や、信心深い様子がうかがわれるエピソード、長雨におろおろ歩き、農民の諍いを止め、体が苦しい時にも農民の相談を聞く等、実際のエピソードと創作のそれ、また「雨ニモマケズ」等の作品から起こしたエピソードが織り交ぜられて展開する。そして末尾では、医者に肋膜炎のおそれがあると告げられてなお村の人々のために働こうとする賢治を周囲の農民が引き止めて家に送っていき、舞台の「陰から」は「雨ニモマケズ」の朗読が聞こえてくるという終わり方になっている。

先ほどの三十六年版の「宮沢賢治」と比較して、「雨ニモマケズ」のイメージを基調として、農民とのかかわりが強調されたつくりになっていることは一目瞭然である。戯曲という創作の形になったときに、仏教への傾倒や宮沢賢治の諸作品への志向が捨象されてしまったということは興味深い。しかし、出版元の大阪書籍がこれ以降中学校用国語科教科書の出版を中止してしまったことで、以後の発展は見られなかった。

光村図書では『中等新国語一』に昭和四十年から五十二年という長きにわたり、賢治と親交があった作家の森荘已池による「宮沢賢治」という伝記教材が掲載された。[9] 内容や掲載写真等も少しずつ改訂されていくが、大きく変わるのは

冒頭と末尾である。

昭和四十年版の特徴としてまず挙げられるのは、賢治の花巻農学校在職中の具体的なエピソードが多いことであろう。そして末尾には、やはり病身をおして「農村の人」の肥料相談を受け、翌日亡くなったというエピソードが選ばれているが、この教材では亡くなったその日に家族に願った法華経頒布のこと等も詳しく書かれている。この版では、具体的なエピソードが多いことと、特に花巻農学校時代のそれが多いことから、農学校の教師であり、後年は農村の教導者でもあったという、人々にとってのある種の「先生」としての「宮沢賢治」が想起されやすい教材となっている。

一方、改訂が進んで行く中で最も大きな変化があるのは昭和四十九年版である。この版の書き出しは「宮沢賢治といえば、「雨ニモマケズ　風ニモマケズ」を書いた詩人として、また、「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」などの童話を書いた作家として、人々から親しまれている」と、それまでとは違って、「宮沢賢治」が世に知られた存在であるという前提に立って教材がはじまっていく。そして、賢治の幼いころのエピソードを増やし、また花巻農学校でのエピソードはやや削って語られるが、やはり具体的なエピソードが多くなっている。

大きく変わっている末尾では、賢治の死の二年前である昭和六年に「病床で、彼は、その精神的自叙伝といわれる「グスコーブドリの伝記」を書いた。」というエピソードが入っている。更には「この「グスコーブドリの伝記」は、賢治の書いた童話のうちでも傑作の一つといわれている。長い童話だが、その内容を手みじかに紹介しておこう」としてその後に梗概が入れられているのである。そして梗概の後には「この童話を読むと、賢治がブドリであるように思われてくる。そこで、この童話は、宮沢賢治の心の中を最もよく書いた、精神的自叙伝といわれているのである。」と附されている。ここでは、グスコーブドリのどのような点が「宮沢賢治」と重ねられているのかは明確には示されてはいな

い。しかし、賢治が「グスコーブドリの伝記」を書いたのは「石灰肥料を生産する工場の技師となり、農民のために肥料の販売斡旋の仕事も始めたが」「また病気になった」際の病床においてであったという説明がなされ、また簡単にではあるが死の前日の肥料相談のエピソードも書かれている等、先に挙げたいくつかの教材例と同じように他者のための自己犠牲という観点がそこに内在していることは容易に推測されるし、また読者にもそのように伝わることが予想されよう。

「宮沢賢治」の伝記としてこの教材が長期間にわたって掲載されたことの影響力の大きさを考えれば、その内容の変遷もまた注目されてよいだろう。農学校時代のエピソードを中心に置き、ある種の「先生」としての「宮沢賢治」を描出していた当初の教材とは違い、改訂後の教材では「グスコーブドリの伝記」の梗概が入ることによって、新たな中心が生まれていると言える。「グスコーブドリの伝記」を紹介するようになったことで、この作品が賢治の作品の中でも特権的な位置に置かれることは想像に難くないからだ。現に教材は「グスコーブドリの伝記」を「宮沢賢治」の「傑作の一つ」として紹介してもいるのである。更に、その作品を「宮沢賢治」の生き方それ自体に重ね合わせることで、「グスコーブドリの伝記」はこの教材全体にフィードバックされていくのではないだろうか。つまり、子ども時代から農学校時代、そして晩年までのさまざまなエピソードの集積であるこの教材が、「グスコーブドリ」的な読みをもって再統合されることが可能になり、他者のための自己犠牲精神に貫かれた「宮沢賢治」という像が描出されうるようになっているのである。

この他、小学校用教科書では東京書籍の『新しい国語5下』（昭和四十五年）、『新編新しい国語5下』（昭和五十一年）

に、堀尾青史による「宮沢賢治」が掲載された。「賢治は、子どものころから、気の毒な人を見ると同情し、助けずにはいられない心を持っていた」と語り、やはり末尾には死の前日の肥料相談のエピソードを紹介する等、この教材もまたこれまでの「伝記教材」と同じ方向性を持つものだと言ってよい内容だったと言える。

これまでの例に見られるように、一口に「宮沢賢治」の「伝記教材」と言っても、様々な語り方がある。しかし、そこに見られる共通点や共通の方向性から見えてくるのは、単なる伝記ではなく「伝記教材」というこのジャンルが、生徒達に示すことのできる偉人としての「宮沢賢治」像を要請したということであろう。それは逆に言えば、作家である宮沢賢治を偉人「宮沢賢治」として再生成していく時に、賢治のさまざまな要素の内でどういった部分が要請されたのか、ということでもある。例えば、その生涯の終わり、すなわち臨終の場面においては実際には様々なエピソードが伝えられているのだが、その中から、多くの教材が病身をおして農民の肥料相談を受けたという場面を選んでいるのである。そして一方、同じ「宮沢賢治」における童話作家や詩人といった要素は「伝記教材」では殆ど要請されてこなかったのだ。「伝記教材」においては、童話作家としての「宮沢賢治」や詩人としての「宮沢賢治」ではなく、他者のために自己犠牲をもいとわない、農民の相談者としての「宮沢賢治」こそが必要だったのである。であればこそ「宮沢賢治」の「伝記教材」とは、光村図書の昭和四十年版等に見られるように、ともすれば作品について触れずとも成り立ってしまうものであったのだ。先に触れたように、改訂後の光村図書版の冒頭では「宮沢賢治」は「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」の作者として導入されていた。このように、「宮沢賢治」は「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」等といったテクストの作者として一般には流通しているという事実は留保された場合においても、しかし「伝記教材」においてはこれらのテクスト、そしてその作者としての「宮沢賢治」は副次的な要素としてしか見られなかったのである。「伝記教材」の

中で要請されたのはこれらのテクストではなく、むしろ「グスコーブドリの伝記」や「雨ニモマケズ」であったのであり、それらのイメージをまとった「宮沢賢治」であったのだ。しかし、この「グスコーブドリの伝記」と「雨ニモマケズ」は、テクストそれ自体への志向によって引用されていたのではなく、「伝記教材」にふさわしい「宮沢賢治」を傍証する意図のもとに要請されていたのである。言い換えれば、この二つのテクストは「伝記教材」という方向性の明確なテクストの中で示されることで、その方向性に共鳴する部分を抽出され、象徴的なテクストとして扱われていたのである。

「雨ニモマケズ」は、例えば大阪書籍版の「桜の住まい」の中では劇の最後に象徴的に引用されて使用されており、強烈な印象を残している。しかし、学校図書版の中では「中でも有名な詩は、「雨ニモマケズ」でしょう」と触れられるに留まっており、また光村図書の昭和四十九年版でも病床で「グスコーブドリの伝記」を書いたと語った後、「また、「雨ニモマケズ」を手帳に書いたのも、このころであった。」とする簡単な記述しかなされない。しかし「雨ニモマケズ」に関する記述がこのような簡単なものであることは、「雨ニモマケズ」に対する価値判断の軽重を示すものではおそらくない。むしろ、同じ光村図書の昭和四十九年版冒頭に「宮沢賢治といえば、「雨ニモマケズ　風ニモマケズ」を書いた詩人として、（中略）人々から親しまれている」という言葉があるように、詳細な説明の必要がない詩であるとの判断が働いていると考えたほうがよいだろう。そしてむしろ、どのような教材においても「雨ニモマケズ」が触れられてきたということに着目すべきである。しかしこのような登場頻度の高さは、「雨ニモマケズ」という詩が、「宮沢賢治」という人物を偉人として語る際には避けて通ることができないということを示すものではなく、「宮沢賢治」を偉人化

する際に非常に有効な要素として「雨ニモマケズ」が要請されてきたということを示しているように思われる。

「雨ニモマケズ」は、「伝記教材」とは別の場所での登場回数も多いテクストである。テクストそのものの教材化としては、教科書検定制度が出来る以前の昭和二十二年、『高等科国語』を改正して発行された国定教科書『中等国語』の第一学年用に「雨にもまけず」として掲載されたのが初めであり、そしてこれ以降はテクスト単体での教材化は長くなされなかった。しかしその代わりに、昭和二十年代から三十年代には、「雨ニモマケズ」を文中に引用した評論テクストが多く教材化されていたのである。

その一つには、谷川徹三の昭和十九年九月の東京女子大学での講演「今日の心がまへ」を元にしてつくられた教材群がある。[10] 元の谷川の文章は長く、また第二次大戦時下という時局性も含んだものであったので、教材化の際に抄出・改変が行われている場合が殆どである。だが、そうした中でこれらの教材にほぼ共通して採られているのは、「雨ニモマケズ」を引用している部分と、また「宮沢賢治という詩人が今日の時代に持っている意味」を示すエピソードとして、亡くなる前日にも「近くの村の人」の肥料相談を受けていたと語り、その後「賢治の名は、歳月のたつとともにますく大きくなる名ではないか、そう私は思っています。」と述べる部分である。このように、この「今日の心がまへ」系教材もまた、「雨ニモマケズ」という詩を引き合いに出し、農民のために尽力した「宮沢賢治」像を立ち上げていく志向があったと言える。

もう一つ、三省堂版で昭和二十六年から四十年までという長期間掲載された評論教材として、古谷綱武の「かけがえのない人間」という文章がある。[11] 教材本文では、自分という人間はただ一人しかいないこととそのかけがえのなさが説かれ、自分がそうであるように他者もかけがえがない人だということを知って、たいせつにしなければならないと語ら

れる。そして、「宮沢賢治という人」は「人間はりっぱに生きなければならないということを、いつも忘れないで生きた人である」とした上で、「とてもよい詩だと思うから、きみたちにも教えてあげよう。」と、賢治の「雨ニモマケズ」を引用する。古谷の言う「りっぱに生き」るということと「雨ニモマケズ」に書かれている内容がどのように接続するのかが今ひとつ明瞭ではないのだが、読者である生徒に向けてある種の生き方を説き、その中で「雨ニモマケズ」という詩を引用し且つ「宮沢賢治」という存在を生徒の手本たり得る存在として祭り上げていくという方向性は、先の谷川テクストの教材例と変らないと言えるだろう。

「雨ニモマケズ」を引用しながら人のために尽くす「宮沢賢治」の生き方を称揚していくという展開を持った、言うなれば「雨ニモマケズ」教材は、この時期他にも何例か見られる。[12] これらは「宮沢賢治」という人物の伝記やその作品について紹介するという形ではなく、「雨ニモマケズ」というテクストのみを抽出してそこに筆者の主張を託して展開していくという教材であった。「伝記教材」にやや先立つこの時期においては、「宮沢賢治」はさほど前景化しておらず、まず「雨ニモマケズ」というすぐれた詩があり、「宮沢賢治」とは「雨ニモマケズ」の作者であり見習うべき人なのである、という語り方が一般化していたと言えるだろう。

主として昭和二十年代から三十年代に生まれた「伝記教材」に先行する一連の「雨ニモマケズ」教材をこのように捉えた時、「雨ニモマケズ」の使われ方という点で見れば、両者の間に実は殆ど差異が見られないことに気づかされる。言ってみれば、評論教材において利用しやすい「雨ニモマケズ」を、「伝記教材」は「宮沢賢治」その人を語る際に流入させたのだと捉え得るのである。「伝記教材」にもまた当然ながら作者が存在する。ここで言う作者とは、教科書教材という性質上単独とは限らない、また作者以外の意思も介在しうる存在としてのそれである。しかしいずれにしても、

「宮沢賢治」という偉人の生涯をさまざまなエピソードによって再構成し、何がしかの教育的な価値をもった物語として物語るという意思がそこにあることは確かである。特に、偉人として扱う場合には、生徒にとって先人として敬うべき思想・行動が不可欠であり、「宮沢賢治」の生涯に何らかの思想的な柱を打ち出し、再構成の中心点にしなければならないであろう。そうした時に、「雨ニモマケズ」という詩を引用し、「宮沢賢治」の行動を逆照射して意味付けていくという方法は、前述のような「雨ニモマケズ」の性質からしても非常に有効な「物語」化であったに違いない。

「雨ニモマケズ」と並んで多く引用されている「グスコーブドリの伝記」は、先に確認したように大阪書籍版、学校図書版、改訂後の光村図書版で梗概が紹介されている。このことは、「雨ニモマケズ」の場合とは、やや違った意味合いを持つものだといえる。というのも、この作品は「雨ニモマケズ」のような短い詩ではなくかなりの長さを持ったテクストであり、梗概とはいえ紹介するにはかなりの紙幅を必要とするものであること、しかも既に知名度の高い「雨ニモマケズ」とは違い題名を示すだけでは内容が殆ど伝わらないため、紹介するにはどうしてもその梗概も必要になってくること等を考えれば、そのような作品を限られた紙幅を費やしてまで掲載するということに大きな意味を見出せるからである。しかもそれが複数社においてなされているということは、「伝記教材」におけるこの作品の特異な優位性を示しているといえるだろう。

「グスコーブドリの伝記」は、そのタイトルが示すとおり、グスコーブドリの一代記だが、「伝記教材」において梗概として紹介される際には、グスコーブドリが人々のために働き、遂には命を落とすというその後半部分が中心になっているのである。梗概の比重や、この作品の扱い方から見ても、「伝記教材」においてはこのテクストの後半に見られる

ようなグスコーブドリの自己犠牲的な行動が要請されていたのだと考えてよいだろう。また更に、そうしたグスコーブドリを「宮沢賢治」に重ね合わせるというあり方もすべての教材で多かれ少なかれ共通しているのであり、このことは明らかに「伝記教材」という場において自己犠牲精神を持った「宮沢賢治」が志向されていることを示してもいる。

さて、これまでの「伝記教材」は、ほぼ中学校用教科書のものであったが、昭和五十二年の光村図書版を最後に、中学校用教科書に宮沢賢治の「伝記教材」が掲載されることはなくなる。しかしこのことは、中学校用教科書における「宮沢賢治」需要の減少を示すものではない。

高野光男は先に挙げた論文において、伝記教材全体が減少する傾向を指摘しているが、その背景として挙げられている「第三次学習指導要領の改訂で「道徳」が特設され（中略）伝記教材の多くが「道徳」の読み物教材に移行していくこと」、後には学習指導要領で「「伝記」の文字が見られ」なくなること、そしてまた中学校用国語科教科書が「昭和36年度までに教科書会社13社が発行を取りやめ」、更には「昭和56年度から現在の5社5種類の発行形態に移行」したこと等が、そのまま「宮沢賢治」の「伝記教材」が消滅した理由として考えられるだろう。[13] 現に、現在使用されている中学校用国語科教科書には「伝記教材」は一つも掲載されておらず、単純に中学校用教科書における「伝記教材」自体が減少したのだと考えてよい。

そして以降、「宮沢賢治」を含め、「伝記教材」は小学校用国語科教科書に掲載されるようになっていく。

3　昭和六十年～現在　新たな「宮沢賢治」へ

昭和六十年、学校図書は『小学校国語六年下』に野村純三による「宮沢賢治の童話」という教材を掲載した。この教材は、表題からすると宮沢賢治の作品紹介が主眼と思われるものであり、純粋な「伝記教材」とは言えないのだが、しかしその内容は「伝記教材」に近いものとなっている。

内容を見ると、前半はほぼ賢治の童話「注文の多い料理店」の紹介に充てられているが、後半部分は宮沢賢治本人の紹介となっている。そして、「ねても覚めても農民たちのことを考えていた賢治の精神を表す童話の一つに、「グスコーブドリの伝記」という作品がある。」として「グスコーブドリの伝記」の梗概を紹介する。さらに、病に倒れてなお農民のために力をつくし、死の前日にも肥料相談に応じたことを語って「賢治は、ブドリのような英雄的な死に方はしなかった。しかし、その死をブドリの死にたとえることはできないだろうか。」と評価して終わるのである。この流れは、これまでの「伝記教材」の方向性と同じものであると言えよう。

また、この教材は次の『小学校国語六年下』（昭和六十三年）では、「宮沢賢治――人と作品」という題名になるが、内容の前半部分にはほぼ変更はない。しかし、これまで「グスコーブドリの伝記」を紹介していた後半部分では、「ねても覚めても農民たちのことを考えていた賢治の心の奥の、深い願いが分かる詩に、「雨ニモマケズ」という作品がある。」として、以前は「グスコーブドリの伝記」の梗概が掲載されていた部分が丸々「雨ニモマケズ」の引用にとってかわる。この場合も、引用後には肥料相談のエピソードを紹介し「賢治の死後、かれが使っていたトランクの中から、手帳が見付かった。その中に、「雨ニモマケズ」の詩は書かれていた。」となるのだが、この構成もまた、これまでの「伝記教材」と同じように、「雨ニモマケズ」を自己犠牲的な文脈において引用していることを示していよう。

このように、「童話」ないしは「作品」に重きをおいた、純粋な「伝記教材」ではないこの教材においても、「宮沢賢

治」の紹介にあたる部分では、これまでの教材と同じように「雨ニモマケズ」「グスコーブドリの伝記」を引用しつつ、死ぬ直前まで農民のために活動したということを強調していくつくりになっているのである。両テクストが入れ替わることによる本文への影響が殆ど見られないということはまた、「宮沢賢治」の「伝記教材」における両テクストの性質の近似性を示してもいよう。

さて、「宮沢賢治」の「伝記教材」は、この学校図書の昭和六十三年版以降、一旦姿を消す。このことはしかし、国語科教科書において「宮沢賢治」が要請されなくなったことを示しはしない。先に述べたように、「宮沢賢治」テクスト自体の教材数は逆に増加傾向にあり、特に小学校、高校での教材数の増加とそれに伴うテクストの種類の増加は、近年目覚しいものがある。そして多くの場合、こうした通常教材には作者紹介が教材末尾等に附される。「伝記教材」は減少しても、これまでに見てきたような「宮沢賢治」イメージを形成し得るための可能性は引き継がれていると言えよう。

また、一方ではこれまでに確認してきたような「宮沢賢治」イメージの枠に収まりきらない「宮沢賢治」が形成され始めてもいる。先の学校図書版の「宮沢賢治の童話」においても、その萌芽は見られていた。前述したように、「宮沢賢治の童話」では、前半部分において「注文の多い料理店」の紹介がなされている。そこでは、宮沢賢治は「注文の多い料理店」を「どのような考えで書いたのだろうか」という疑問が示され、以下のように続く。

「注文の多い料理店」という童話は、生き物を殺すことを楽しむ紳士が、いつの間にか生き物に殺されようとし

ていたという、大変不気味な話である。賢治は、今の公害や原爆を知らなかったが、生き物を遊びのために平気で殺すような考えや行いを続けていると、どんなおそろしい結果になるかを予感し、警告しているように思われる。

深い宗教心に支えられていた賢治の童話には、生き物同士が殺し合うことへの悲しみやいかりをうったえ、生きているものすべてがたがいに尊重し合う世界をゆめ見た作品が多い。（後略）

「生き物」を殺すことに対する葛藤というモチーフは、これまでの「宮沢賢治」の「伝記教材」には見られなかった要素である。何より、人間以外の動物を含む「生き物」に対する視線それ自体が、クローズアップされては来なかったものであった。先にも述べたようにこの教材は純粋な「伝記教材」ではないのだが、こうした視点は新しい「宮沢賢治」像が生まれてきている状況を反映したものだったのではないだろうか。その点を考えるために、最後に現行教科書における二つの「伝記教材」を参照したい。

東京書籍は『新訂新しい国語六下』（平成十一年）と、現行の『新しい国語六下』（平成十三年）に、「作家と作品をかかわらせて」と冠した西本鶏介の文章「宮沢賢治」を掲載している。

「宮沢賢治は、自分の理想とする世界を求めて激しく燃え続けた、太陽のような人であった。人間も動物も自然も一つになって、「まことの幸せ」がどこかにありはしないかと、生がいをかけて探そうとした。」と冒頭から激しい調子で語られるこの教材では、「宮沢賢治」の生涯等伝記的事項についての詳細な紹介はあまりなされないのだが、その中で「グスコーブドリの伝記」を引き「教師をやめ、厳しい生活に苦しむ農民のために働きたいと思い続けた賢治のあこが

れの生活であった。」と語る辺り等は、これまでに見てきた「伝記教材」における「宮沢賢治」像への志向も未だに残っていると言えよう。

しかし、その一方で「中学を卒業しても、賢治には自然の魅力が忘れられなかった。」等、「自然」に対する志向をも語っていくのである。

賢治は、急に童話が書いてみたくなった。その気持ちを詩にうたいたくなった。童話の中では、現実にできないことがいくらでもできる。現実には見えないものまで見ることができる。動物も人間も自由にことばがかわせる。だれもが仲良く暮らせる理想的な世界だって作ることができる。こうして、賢治は童話を書き始め、心にうかぶ思いを詩に書いた。

こうした、動物等に代表される「自然」へのまなざしは、先の学校図書版にも見られたものであったが、この東京書籍版「宮沢賢治」では、それが更に「賢治は、人間と自然が心を通わせ、宇宙を支える小さな命となってこそ、農業も宗教も、いきいきとした、美しくてたのもしいものになると考えた。」として農民への献身へと結び付けられていく。このような「自然」に対するまなざしが焦点化されたこと、またその流れにおいて、作品がこれまでの「伝記教材」の文脈と結び付けられたことは、興味深い試みであると言えよう。この教材では、その末尾においても「賢治は（中略）宇宙にあるすべてのものが仲間になることを願い、だれもが幸せになれる新しい世界を求めて、自然と心ゆくまで語り合う独自の文学を作り出したのだ。そして、賢治は、みごと宇宙にかがやく小さな星となったのである。」と、「自然」、

そして「宇宙」へ向かって行った「宮沢賢治」という意味づけをおいているのである。

また、光村図書は、『国語六年（上）』（平成十三年）において「やまなし」、そして畑山博による文章「イーハトーヴの夢」を掲載している。この教材は、教材前半では農学校教員時代のエピソード、後半では羅須地人協会の活動や死の前日の肥料相談のエピソードが語られ、基本的には農民のために力を尽くした「宮沢賢治」という、これまでの「宮沢賢治」像を踏襲した方向性を持っている。そしてまた、

暴れる自然に勝つためには、みんなで力を合わせなければならない。力を合わせるには、たがいにやさしい心が通い合っていなければならない。そのやさしさを人々に育ててもらうために、賢治は、たくさんの詩や童話を書いた。

と、先の東京書籍版のように、農民のために働こうとする志向とその作品とを結び付けようともしている。そして、「風の又三郎」「セロ弾きのゴーシュ」などにまじって、やはり「グスコーブドリの伝記」を「生きては帰って来られない」火山への道行きを、「グスコーブドリが、自ら進んでやる」物語として紹介することも、これまでのような人々のために自己犠牲を行う「宮沢賢治」像への志向が見られると言えるだろう。

だがその一方で、「北守将軍と三人兄弟の医者」というこれまで教科書上ではあまり挙げられることのなかった作品が紹介されているのは重視したい点である。教材本文では、「北守将軍と三人兄弟の医者」というテクストが、「人間の

病気を治す病院」「動物の病気を治す病院」「植物の病気を治す病院」という三種類の病院が「同じ大きさで、どれも同じように大切だということが書かれている」作品として紹介されている。その物語内容には全く目を向けないまま、「人間」「動物」「植物」という三者が等しく扱われているという点のみに着目していくこの紹介のあり方には、「動物」「植物」といった「自然」物に目を向けていた「宮沢賢治」という像への志向を見いだすことが出来るだろう。教材本文では更に「賢治がイーハトーヴの物語を通して追い求めた理想。それは、人間がみんな人間らしい生き方ができる社会だ。それだけでなく、人間も動物も植物も、たがいに心が通い合うような世界が、賢治の夢だった。」と、「動物」「植物」と結びつく形で「宮沢賢治」を語っていくのである。このように光村図書版においても「動物」「植物」という要因を導入することで、これまでの「宮沢賢治」像には収まりきらない視点が開かれる可能性が生まれているのである。

「動物」「植物」を含む「自然」へのまなざしを持った「宮沢賢治」という、これまでに描かれて来なかった「宮沢賢治」像が近年こうして「伝記教材」に現れはじめた背景の一つには、「賢治テクスト」による教材の増加傾向が考えられる。賢治教材の増加は、単に数のみならず種類においても見られ、これまで教材とはならなかったテクストも教材化されるようになり、多様化の様相を見せている。その一例として、三省堂の高等学校用教科書『現代文』（平成六年）や、光村図書の『国語1』（平成八年）における「銀河鉄道の夜」掲載を挙げたい。宮沢賢治作品の中でも著名なこの作品は、これ以前には教材化されたことがなかったものである。その理由としては、テクストの長さや難解さ等さまざまな要因が考えられるが、この二教材は抄録と削除部分の梗概化を行う等して、そうした困難を乗り越えようと試みている。こうしたテクストの多様化は、国語科教科書というメディアにおける「宮沢賢治」イメージをも多様にしていく

可能性を孕んでいると言えよう。「伝記教材」の変化は、こうした国語科教科書における変化を如実に受けているのだと言えよう。

だが、その多様化の内実については更に注意深く見ていく必要があるだろう。例えば、先の東京書籍版の教材は、賢治の童話世界を「まるで昔話のように、人も動物も精霊もいっしょになって登場する」ものとして称揚してゆく。だが、そのような童話の例として挙げられている「鹿踊りのはじまり」や「風の又三郎」は、むしろ「人」と「動物」あるいは「自然」との分かり合うことの不可能性を示していると受け取れるテクストでもある。また、先の光村図書版中の「北守将軍と三人兄弟の医者」に見られる一面的なテクスト紹介は、このテクストの物語内容に入り込もうとさえしていない。このように、テクストの意図的なあるいは一面的な解釈を用いて「宮沢賢治」を語るような方法には、さまざまな問題があるように思われる。

「伝記教材」はあくまでも教材であり、そこに作為が存在するのもある程度当然のことではあろう。「伝記教材」がそれにふさわしいあるべき「宮沢賢治」像を措定するのであれば、そこに過不足や誤謬が含まれているからという理由でただちに批判の対象とする必要はない。だが、このように「自然」というタームを安易に引き寄せることで生成される「宮沢賢治」像はあまりに楽観的であり、そうした安易さにはやはり問題が残るのではないだろうか。こうした点については、今後更に論じる必要があるだろう。

先に述べたように、この二種類の現行「伝記教材」は、国語科教科書の中で多様化する「宮沢賢治」を受け止め、「自然」への傾斜という部分に焦点を当てたという点において、大きな意義を持っている。しかしだからこそ、逆に近

年の多様化する「宮沢賢治」の問題点をも内包してしまっているのであり、それは今後の「伝記教材」、ひいては宮沢賢治テクストを教材化していく際の課題として見つめていくべき点であると言えよう。

注

(1) ここでは同じ出版社による同じ種類の全学年用教科書を合わせて一種類と数えている。

(2)『静修短期大学研究紀要』19、昭和六十三年。同論文によれば、教科書の検定時期ごとに分けた場合の三期間継続で扱われたのは日本人では「宮沢賢治」のみであり、四期以上継続した人物はいない。また、掲載された教科書の種類も、日本人では福沢諭吉、伊能忠敬についで三番目に多い。

(3)「戦後中学校における伝記教材の変遷――「伝記教材」研究序説――」(『早稲田教育評論』4―1、平成二年)

(4) 教科書名の後に示した年は教科書検定年である。以降の記載も同じである。

(5)「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(「農民芸術概論綱要」)

(6)「オッペルと象」とは現在「オツベルと象」として知られるテクストである。昭和二十七年の『総合中学国語一上』から同テクストを掲載しはじめた教育出版は長らくこの「オッペルと象」というタイトルを使用していた。これ以降他社における教材化においてもこのタイトルが採用されていたが、昭和五十二年に三省堂の『中学校現代の国語1新版』は「オッベルと象」として掲載、教育出版も昭和五十五年の『中学国語I』からは「オツベルと象」として掲載し、以降は「オツベルと象」が主流となった。このテクストに関する本論での以降の記載は、テクストの名称として記す場合を除いてすべて原文に拠るものとする。

(7) 総ページ数は教材本文部分のみで約八ページ。

(8)「はるかな作業」(『春と修羅 第三集』七三八)

(9) 昭和四十年、四十三年、四十六年、四十九年、五十二年の版に掲載。

(10)「十一月三日」(教育図書『国語中学校第一学年用一』(昭和二十三年)に掲載)、「雨にもまけず」(秀英出版『私たちの国語二下』(昭和二十三年)、『私たちの国語改訂版二下』(昭和二十五年)に掲載)、「雨ニモマケズとその作者」(開隆堂『国語総合三上』(昭和三十三年)に掲載)、「雨ニモマケズとその作者」(学校図書『中学校国語二上新版』(昭和二十九年)に掲載)がある。

(11)三省堂『中等国語一下(改訂版)』(昭和二十六年)、『中等国語三訂版一下』(昭和二十九年)、『中等国語四訂版一下』(昭和三十一年)、『中等国語五訂版一』(昭和三十四年)、『中等国語一』(昭和三十六年)、『中等国語新訂版』(昭和四十年)に掲載。

(12)「雨ニモマケズ」(無記名、光村図書『中等新国語文学編二上』(昭和二十六年)、『中等新国語文学編二上』(昭和二十九年)、『中等新国語総合篇一上』(昭和二十九年)、『中等新国語総合篇一上改訂版』(昭和三十年)に掲載)、「ソウイウモノニワタシハナリタイ」(無記名、学校図書『わたしたちの国語六年上』(三十三年)に掲載)等がある。

(13)第三次学習指導要領改訂は昭和三十三年である。なお(3)の安藤論によると、中学校学習指導要領の国語の項では昭和五十二年度版から教材のジャンルが記載されなくなり、必然的に「伝記」という単語が消えたということである。